

品川女子学院

社会課題の発見とその解決に向けた生徒主体の取り組み 「CBLプロジェクト」

～ “子宮頸がん” をテーマとした活動とそのプロセスについて～



外部コンテスト全国大会出場を記念した盾とともに

2020年4月発行のFORWARD第61号に掲載した、品川女子学院のCBLプロジェクトを覚えているでしょうか。同校では高2の家庭科の授業と総合的な学習の時間を使い、CBL (Challenge Based Learning) という、課題解決型学習を約半年間かけて行っています。テーマを決めた後、調査・分析を行い、集めた情報をもとに解決策を考えて、実行に移す、という活動です。2020年度学年代表に選ばれたグループの1つが「子宮頸がんの予防と早期発見のために」をテーマに活動し、学内のみならず、学外のコンテストでも高い評価を受けました。CBLの活動を通して、メンバーの中で「普及」が大義となり、高校3年生に進学した今も受験勉強の合間を縫って学内外でアクションを起こしています。この活動にかかわった遠藤咲幸さん、工藤真菜さん、齊藤凜さん、森田朱音さんと、CBLの担当者である家庭科の丸山智子先生に、学びを深める活動のプロセスと成果について伺いました。

品川女子学院 CBL (Challenge Based Learning)

「社会で活躍できる女性の育成」をめざす品川女子学院『28project』プログラムの一つであり、高2の家庭科の授業にて行われている課題解決型学習。

4、5人の小グループでCBLに取り組む。教師からのテーマ指示は行わず、解決したいテーマ決めから、全て生徒が行う。また、生徒の議論をサポートする役として、1グループに1人のメンター（他教科教員）がつき、進めていく。

授業には2～3名のがサポート役として参加し、グループをまわってアドバイスをする。各グループのテーマに対する助言だけではなく、CBLの経験者として、グループワークを進める上でのポイントや計画の重要性など、協働学習を進めていくコツについても伝授している。

最終的には各クラスにてプレゼンテーションが行われ、クラス発表から選ばれる10グループはCBL学年代表としてプレゼンテーションを行う。

『28project』とは

28歳の自分を思い描き、それを実現するためには何が必要か、どう行動すべきかを模索し、理想とする未来に向かっていくプロジェクト。能動的に人生を設計できるようにさまざまな取り組みを実践しています。

＜社会課題選択の背景＞

昨年度の活動はいつからどのように始めましたか。

丸山先生 コロナ禍で当初リモート授業だったため、本格的に始めたのは5月からです。グループを作り、問題を発見するところから始めました。グループはクラスごとに自由に決めさせています。4、5人のグループが多く、時折3人、あるいは6人になることがあります。グループで協働することを目的としているため、役割分担（班長、記録係、ICT係）をしますが、全員で協力し合いながら進めていくよう、声をかけています。

遠藤さん 私たちは4年生（高1）の頃から「一緒にやりたいね」と話していました。CBLは活動期間が長い上に、意見を出し合いながら活動を進めていかなければなりません。だから、誰と一緒にやるかが重要です。活動が始まってからは、みんながモチベーションを保てるように、話しやすい空気感を作ることを心がけました。信頼できるメンバーだったからこそ、充実した活動ができたのだと思います。

■ 生徒さんの成長を促すために、意識していることはありますか。

丸山先生 生徒たち自身で考えてほしいので、CBLでは『教えない』ということを大切にしています。おおまかなスケジュールとステップは提示しますが、生徒は自分たちで考えて、困った時は身近なメンター（他教科の教員）に相談しながら進めていきます。そのため、進め方も生徒が導き出す問題解決策もさまざまです。

テーマは「自分事であること、なおかつ社会課題であることを

意識して選ぼう」と伝えていきます。生徒はエピソードなどを持ち寄り話し合い、テーマを絞ります。このグループは『子宮頸がん』を選択して、活動を行いました。

■ なぜ『子宮頸がん』に着目したのですか。

遠藤さん メンバーの工藤さんが、子宮頸がんの予防法である『HPVワクチン』の話をもとに、話題にしてくれたことがきっかけです。調べてみると、日本ではHPVワクチンの接種率が低いことや、ワクチンの存在を知らない若者が多いことなどがわかりました。私たちは理系クラスなので、理系分野を中心にいろいろな案を出していましたが、社会問題として扱えることと、この状況を変えたいという思いから『子宮頸がん』をテーマに選びました。

森田さん CBLでは解決策まで考えなければいけなかったのですが、解決策が見えにくい、という理由でボツになったテーマもたくさんありました。

遠藤さん みんなで問題点を出し合うとジャンルがさまざまでしたので、系統別に分類し、その上で、1つ1つの問題点に対してどのような解決策が考えられるかを話し合いました。その際に、みんなが共感できるかどうかを確認しました。当事者と当事者以外の人、どちらもわかるテーマが社会問題として挙げられるテーマだと思うので、4人でいろいろ話して『子宮頸がん』に決めました。

＜ 学びを深める工夫や進め方 ＞

■ テーマ選びの後は、どのように活動を進めましたか。

遠藤さん 先生から「夏休みまでに情報を集めて、そこから解決策を考えていこう」と、大まかなスケジュールを提示されていたので、まずは正しい情報を得ようと、インターネットや新聞記事、書籍、論文など、二次情報を調べました。長めの記事が多いので、私たちに必要な部分だけを要約して共有する、という方法で進めました。調査と並行して、校内アンケートも実施しました。『子宮頸がん』『HPVワクチン』『検診』を知っている人は5～6%しかいませんでした。中でもHPVワクチンは「言葉すら知らない」という人がたくさんいました。

■ その現実をどのように受け止めましたか。

遠藤さん その段階ではまだ、こんなに少ないんだ、と思った程度でした。自分たちも『子宮頸がんの予防と早期発見のために』というテーマを掲げて知識は得たものの、解決策までは見えてい

なかったもので、子宮頸がんワクチン、検診について、実際に携わっている方にお話を伺いたかったです。そこで、がん予防などの活動をしている団体の方、お医者さんや助産師さんなどに連絡させていただき、ご協力いただきました。取材をする中で、「実際に子宮頸がんや子宮がんを患った方の話も聞いてみたら？」というアドバイスをいただき、患者の会を開いていた原千晶さんにもインタビューをさせていただきました。

丸山先生 このグループの取材数はかなり多いです。基本的にZoomで行ったのですが、週に1回くらいのペースで取材していました。

遠藤さん 8月は本当に忙しかったです。4人で参加できる日を選び、分担して取材依頼のメールを送りました。8件連絡させていただき、6件取材させていただくことができました。基本的に取材依頼をした人が司会を担当しました。



オンライン取材対応の様子

■ インタビューを通して気づいたことを教えてください。

遠藤さん まず、心を動かされました。本気で伝えていかなければいけない、と思いました。着眼点も増えました。取材前は「子宮頸がんの予防と早期発見のために」というテーマで、ワクチンと検診の話しようと考えていました。つまり2方向でしたが、話を聞くうちに、例えば、ワクチンが推奨されていないことを、お医者さんはどう考えているのだろうか。ワクチン接種を勧めるリーフレットを作成している自治体もあれば、作成していない自治体もあります。どちらにもその意図を聞きたいなとか。取材前にはなかった着眼点が見えてきて、普及の必要性を強く感じました。

工藤さん 私も、これは問題なのではないかという思いが、確信に変わりました。自分がテーマを出したこともあって、最初から問

題意識をもって活動してきましたが、裏付けるものが自分の体験しかなかったので、不確かな部分もあったのです。その部分が、インタビューを通して払拭されて、(知る機会がないことは)本当にまずい、と思うようになりました。

森田さん 私は当初は子宮頸がんについて知らなかったのですが、現場で医療に関わっている方の声を聞いて、すごい問題なんだと感じましたし、他の国々の状況をグラフなどで見ると重要な問題であることに気づいて、意識が変わりました。

齊藤さん 私もインタビューをきっかけに、活動に取り組む姿勢が変わりました。それまでは自分事として捉えきれていなかったのですが、子宮がんを患った方から「検診などを受けていれば防げていたかもしれない。知らなかったことで病気になり、人生が狂わされた」という言葉を聞いて、心を動かされましたし、ちょっと泣きそうになりました。私も何も知らずに過ごしてきて、定期接種年齢(小6～高1)を過ぎています。同年代の人たちも同じような状況なら、これはすごい問題です。それからは、伝えていかなければいけない、という思いで活動できました。

■ インタビューを機に、一気に視界が開けたのですね。

遠藤さん 私たちのテーマである、子宮頸がんの予防と早期発見のために活動している大人の方々はいますが、学生に下りてくることはありません。こちらが興味を持てば知ることはできますが、そうでなければ知らないまま卒業します。そうした現状から、伝えるべきは、私たちと同年代の中高生ではないか、と考えました。中高生が中高生に教える。伝えていく。その考えをベースに、解決策を考えることにしました。

工藤さん ワクチン接種については、賛成と反対の2つの意見に割れます。本などを頼りに知識を深めると、どちらの意見にも背景があることがわかりました。

遠藤さん 私が親に「ワクチン接種をしたい」という話をすると、「親の気持ちは別だよ」と言われました。ワクチン接種については世代により捉え方が異なるので、私たちが「受けたほうがいい」「受けないほうがいい」とは言えない。私たちは正しい情報を伝えて、考える機会を作ることに専念しようと思いました。そこはブレない軸として持っています。ターゲットを中高生に設定するならば(ワクチン接種の)メリット、デメリットをしっかりと伝えた上で、「受ける、受けないは自分の意思で決めることが大切だよ」「20歳以降は継続して検診をしていこうね」というメッセージを伝えることが私たちの解決策になる、と考えて、具体策を検討しました。

行動に移す、という、最終課題に立ち向かう上で苦心したことはありますか。

遠藤さん 何も知らない人たちに、いかに知ってもらうか。いかに理解してもらうか。それを考えることはとても大変でした。中高生を対象に、学校で伝える、というところから、先生方に日頃から意識していることを何うと、「生徒たちが学びたいことを教えるのが先生の役割」という言葉が耳に残りました。それが私たちの活動する意味だと思い、何をするか、というところで意見を出し合いました。そこで出てきたのが、カルタを作る、というアイデアです。みんながルールを知っていますし、子宮頸がんという難しいテーマに触れるきっかけを、簡単にしてくれるツールになり得るので、作ることにしました。

また、メディアの影響により、親世代が持っているワクチン接種に対する悪いイメージを取り払うことも必要だと思いました。その方法として、解決策(授業の実施)の後に配布するチラシを作成しました。そのチラシには、子宮頸がんの説明だけでなく、医療従事者の思いも載せることにしました。

丸山先生 アクションを起こすのは簡単なことではありません。そこまでたどり着かないグループもたくさんあります。たどり着いても、例えば、資料をまとめて配る、サイトにまとめるなど、手近なアクションに行きがちなので、「調べたことをまとめて満足せずに、1人でも多くの人に影響を与えられるアクションを起こそう」と伝えていきます。



■ カルタ作りのプロセスや工夫したことを教えてください。

遠藤さん ①伝えたい内容を決める（子宮頸がん・ワクチン・検診について、それぞれ伝えたいことを洗い出して精査した）、②分担任して解説文を作る、③それに対比する形で読み札を作る、④絵札を作る、という順に進めて、25枚のカルタを作りました。読み札よりも解説文を先に作ったのは、それが伝えたい情報だからです。

また、定期接種年齢が小6～高1ということ、商品化が実現すれば、家庭で小6よりも小さい子どもがやることもあるだろう、と考えて、漢字にふりがなをふりました。

頭文字もかぶっていて、それでもよとしていたのですが、その後、かぶらないように表現を変えました。そこでは齊藤さんと森田さんがものすごく活躍してくれました。

■ カルタを使った授業の実現に向けて、どのように行動しましたか。

遠藤さん 最初は自分たちで特別講座のようなものを開いて、一緒にやってもらう。そんな形式を考えていたのですが、それでは参加者しかできないので、授業に取り入れることはできるのか、という相談を丸山先生にしました。「保健の先生が協力してくれればできるのでは？」というアドバイスをいただき、お願いに行くと、たまたま定期試験前で「1時間余っているから使っていいよ」と言ってくださいました。さっそく概要をお話すると、「カルタだけでは授業ができない」と言われました。それは保健の先生だけでなく、丸山先生やメンターの先生にも指摘されたことでした。「これさえあれば授業ができる、というキットを作ったほうが先生方の準備の負担が減り、多くの学校で取り入れてもらいやすいのでは」というお話をいただいて、大急ぎで作ることにしました。「カルタを全部やってから説明するよりも、1枚取るごとに説明したほうが聞いてもらえるのでは？」というアドバイスは参考になりました。授業をイメージすると、先生が説明する際に口頭だけだ



保健の授業での実践

とわかりにくいし、流れていくと思ったので、「スライドも作ろうか」ということになり、カルタの枚数分、スライドを作りました。カルタ作りと同時進行だったので大変でしたが、両方を2週間くらいで仕上げました。私たちの活動の経緯や、授業のねらい、授業の流れがわかるような資料のほか、テーマに関連する情報として簡単な説明も入れたのですが、先生から「授業でもう少し話を加えたいと思った時に調べられる、サイトの情報がほしい」と言われたので、関連のある信頼性のあるサイトのQRコードを載せました。カルタもバラバラではなく、話の流れができる順番に読み札を並べて先生に渡すと、「いいね」と言ってもらえて嬉しかったです。

＜ソーシャル・ビジネス・プラットフォーム (SBP) 参加について＞

■ ソーシャル・ビジネス・プラットフォーム (SBP) に参加した目的や意図を教えてください。

遠藤さん 丸山先生が勧めてくださったからです。学内で発表する機会はあっても、学外の、まったく知らない方々に見ていただく機会は少ないので、良い機会だと思いました。SBPはビジネスアイデアをアピールするコンテストなので、活動資金を生み出すためにカルタを商品化し、ビジネスとして成立させるという意図もありました。

工藤さん SBPではスライドがうつらないというアクシデントもありましたが、発表している途中から、聴いている方がチャット機能にコメントを書き込んでくださり、結構盛り上がっていたので嬉しくなりました。「本当にこれって問題ですよね」というようなご意見を、たくさんの方からいただき感動しました。

■ プレゼン資料の作成で気をつけたことを教えてください。

遠藤さん 外部のコンテストでは、そのコンテストの趣旨や目的に添うように資料を作っています。

学年代表を決めるプレゼンには評価基準があるので、それをガイドラインに、『子宮頸がんとは』という話から入って、私たちの活動がすべてわかるような流れで作りました。その中で「今、決めることが大事なんだよ」「ワクチン接種をしないにしても、検診はちゃんと行こうね」ということを強調しました。そして「情報を知らないなら知る必要がある」「ワクチンを接種するなら性交渉をする前に受けたほうがいいよ」というメッセージで締めくくりました。

SBPは、ビジネスアイデアをアピールするコンテストなので、カ

ルタの商品化を強調しました。今後の展望を多めに伝えたほか、聴き手は大人の方が多いと思ったので、「今、決める」ではなく、「ワクチンは大人の方でも接種できるし、検診は大事にしてほしい」ということを伝えました。

丸山先生 このグループはエントリーシートの時点で変えてきました。SBPの後にマイプロジェクトアワードにも出たのですが、その時は「この大会は、思いを大切にしている大会だよ」という話を4人でして、CBLの経験から自分たちは何を学んだか、というところをフォーカスして出してきました。一つひとつきちんと考えて対応している姿に感動しました。

遠藤さん 書類審査で落ちてしまったら私たちの活動の普及につながらないので、そこは考えました。エントリーシートには文字数制限があり、伝えたい思いをすべて書くことはできないので、何を残して何を省くかも話し合っています。



学年代表を決めるプレゼンの様子

<自身の成長について>

CBLを終えて、成長を感じる部分を教えてください。

森田さん 私はインタビューをしていく中で、子宮頸がんをいろいろな面からとらえたり考えたりすることができるようになったと思います。しゃべることが得意ではないので、プレゼンの時は準備に力を入れました。原稿を考える時にどうすれば伝わるかなと、すごく細かい表現にもこだわりながら活動し、力がついたと思います。

齊藤さん 私はリーダー経験がない中で、最初のインタビューを仕切ることになってしまい、不安でした。やり方がわからず、至らない点が多々あったと思いますが、インタビューさせていただいた方がすごく優しい方で、無事に終わることができ、その経験は大きな糧になりました。また、外部のコンテストでいろいろな方と話す機会を得て、視野が広がりました。

工藤さん 私はこれまでまとめ役になることが多かったのですが、今回はリーダーと距離は近いものの、まとめ役とは異なるポジションに初めて就いて、どう振る舞うべきかをものすごく考えました。それがすごく勉強になりました。自分がまとめ役だった時に、みんながしてくれてすごく助かったことをふと思い出し、自分の行動に結びつけました。リーダーは1人で考える時間が多くて負担も大きいらしいと思っていましたので、なるべく支えになれるように、と考えていました。CBLは活動期間が長いですし、作業量も多くて大変な時期もありましたが、中1の頃から、いろいろなグループ活動を経験してきたので、全員がちゃんと動かないと大変なことになる、ということも、身に染みて感じていました。着実に進めるためには、指示があればやる、という信頼関係が必要だということも理解していました。そういう意味ではこれまでの経験をすべて生かして活動できたと思います。

遠藤さん 私は溜め込むくせがあるのですが、今回は安心して「これ、お願い」と言える環境づくりができたことが、成長できたところではないかと思っています。メンバーが優秀で、エントリーシートを書くにしても、私が「こんな感じなんだよね」と話すだけで上手に言語化したり要約したりしてくれて、安心して任せることができました。工藤さんのこまめな声かけにも助けられました。

<今後の課題や展望>

授業としてのCBLは終わりましたが、今後について考えていることはありますか。

遠藤さん 私たちが育った私立の女子校は、性にかかわることを話しやすい環境だと思いますが、学校には私立校と公立校、さらに女子校、男子校、共学校があって、環境が異なります。授業に取り入れてもらうことは簡単ではないと思いますが、男子校や共学校でもカルタを使った授業をしていただけたら嬉しいですし、それぞれに合う授業キットを作っていけたらいいなと思っています。「子宮頸がんは女性の病気。だから男子校では扱わない」ということではなくて、男子校でも情報を伝えていく必要があると思います。

どのくらい需要があるのかはまだ分かりませんが、カルタの商品化についても考えています。いろいろな企業の方々とお話させていただいています。CBLではフリー素材を使っていましたが、オリジナルに差し替えたいと考えています。絵を一新できたら無料で配布して、手応えがあれば商品化の仕組みを作っていきたいと考えています。

大学受験が控えているのでグループとしての活動は休止していますが、私は活動しています。中3生とその保護者の方に向けたリーフレットの作成に携わらせていただくことが決まりました。また、アイデア段階ですが、中高生が参加しやすいイベントを企画することを考えています。

CBLから素晴らしい活動が生まれています。今後に向けて考えていることがあれば教えてください。

丸山先生 先ほど遠藤さんも話していましたが、外に出る機会をもう少し増やしていきたいと思っています。まだまだ学校内で完結してしまうことが多いので、もっと積極的に外部の大会に参加してもらい、いろいろな人と出会って、活動が広がっていく、という、良い連鎖が生まれるとおもしろくと思っています。

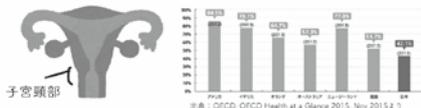
子宮頸がんへの正しい情報を伝えるために作成されたリーフレット

子宮頸がんについて話してみませんか？

品川女子学院 遠藤咲幸 工藤真菜 齊藤凜 森田朱音

0.子宮頸がんとは

子宮頸がんは子宮の入り口(頸部)に、HPV(ヒトパピローマウイルス)感染によって起こるがんで、**子供を諦めなくてはならない可能性もある**、20~30代の罹患数が多い病気です。ワクチンや検診により**予防・早期発見が可能**であり、ワクチンが存在する唯一のがんです。しかし日本の検診受診率42.1%、ワクチン接種率は1%未満と極めて低いです。



1.HPVワクチンとは

国内で承認されているHPVワクチンには、**2価**：子宮頸がんの主な原因となる16型と18型に対応するワクチン
4価：16型と18型に加え、良性の尖形コンジローマの原因となる6型、11型の4つの型に対するワクチンの2種類があります。
(9価ワクチンは2020年7月21日に承認されていますが、まだ接種することはできません。)
現在、世界の80ヵ国以上で国の公費助成によるワクチン接種が行われています。日本でも**小学6年生~高校1年生の女子を対象に定期接種が行われています**。ワクチン接種により、**9割の16型と18型の感染及びがんになる前の前がん病変を防ぐことができる**と言われていいます。**3回の接種が必要で、初めての性交渉の前に接種することが効果的**です。

2.HPVワクチンに関する現状と問題

- ワクチン接種率の低迷
国による積極的勧奨の中止以来、1%未満となっています。
- ワクチン接種後の体調悪化
定期接種が始まってすぐ、ワクチン接種後の体調悪化を訴える人が現れたことによりワクチンの副反応が疑われ、メディアでセンセーショナルに取り上げられましたが、その後の調査により**ワクチンとは無関係である**との結論が出ています。

↓副反応と思われた症状の一覧

	主な症状	頻度
軽度な副反応	発熱、接種部位の痛み・腫れ、注射の痛み・恐怖による失神	他の薬剤の注射、採血でもしばしば見られます。
重度な副反応	アナフィラキシー(重いアレルギー)、ギランバレー症候群(手足の神経障害)、急性散在性脳髄膜炎(頭暈、意識低下、脳神経の疾患)	100万から400万接種に1回
	複合性筋所序症候群(CRPS)	820万接種が行われた中で3例

子宮頸がんワクチンの副反応で重篤と判定されたものの発生率は、ヒブワクチン、小児用肺炎球菌ワクチン、日本脳炎ワクチンと比較すると、**ほぼ同等かやや高い程度**です。欧米で、**副反応がある**との理由で子宮頸がんワクチンを中止した国は皆無です。WHO、厚生労働省ともに「**ワクチンとの因果関係は認められない**」と発表しています。

3.医療関係者の方の思い

インタビューさせていただいた方々に、子宮頸がんワクチンについて伺いました。

助産師

病気を予防するチャンスを手にしてほしい

医師

保護者の方にもワクチンについて知り、考えていただきたい

医師

ワクチンについて、怖いから知らないに変わってきている。定期接種で無料で受けられるはずなのにそれを知らず接種しなかった方の中で、前がん病変が見つかる方が出てきている。

4.さらに調べたい方はこちら

- ①ヒトパピローマウイルス感染症~子宮頸がん(子宮けいがん)とHPVワクチン~(厚生労働省)
 <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou28/index.html>
- ②子宮頸がんとHPVワクチンに関する最新の知識と正しい理解のために(日本産科婦人科学会)
 https://www.jsog.or.jp/modules/jsogpolicy/index.php?content_id=4
- ③子宮頸がんのワクチンと副作用(大槻レディースクリニック)
 http://www.otsuki-ladiesclinic.jp/con_keigan.html

このリーフレットが子宮頸がんについてご家族で考えるきっかけになれば幸いです。また、ワクチンを受ける受けないに関わらず、**20歳から子宮頸がん検診を受けることがとても重要です。**

この活動やカルタに関する問い合わせは、品川女子学院 家庭科 丸山先生までお願いいたします。
(品川女子学院 03-3474-4048)